「岐阜東高校校歌制定」に係る考察

令和６年２月 17 日（土）10 時より
ひんがし会館にて「第８回学校史研究会」
12 期蛍雪科卒　坂井至通

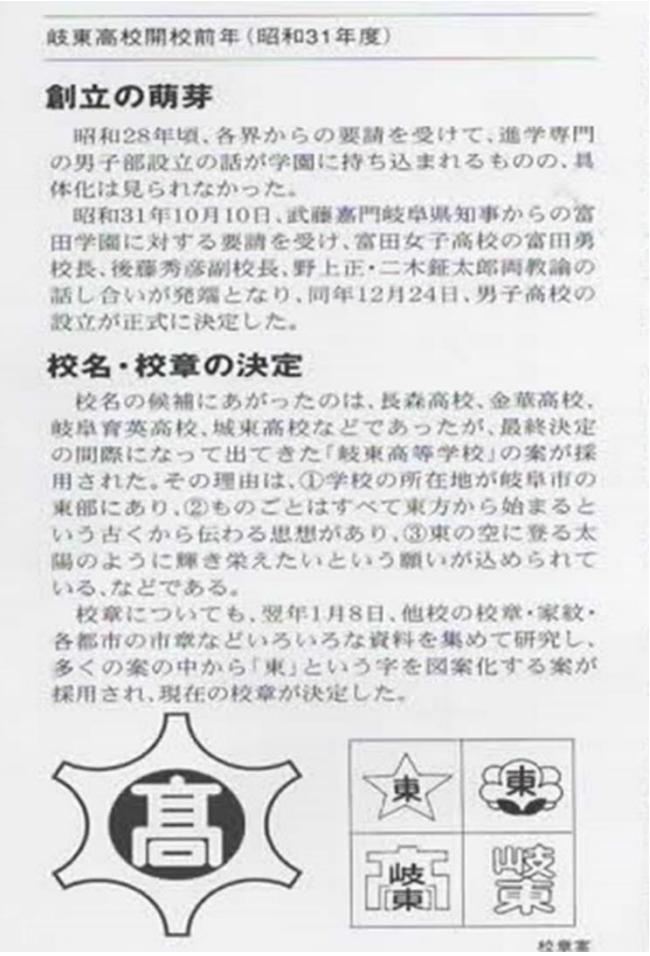
１．はじめに

「ひんがしの空～明けわたり～」で始まるわが校の校歌は、何時、どの様な経緯で作られたのでしょうか。会報誌「五十年のあゆみ」を手掛かりに紐解いて行きます。

２．岐阜東高等学校（岐東高校）開校当時の様子

昭和 32（1957）年４月に岐阜東高等学校（当時は岐東高校）は開校しました。翌年２年目の昭和 33（1958）年５月にはバレー・バスケット・サッカー・軟式テニス・卓球・軟式野球・体操・陸上競技・新聞・図書・放送・演劇の１２クラブ活動が発足し、３年目には柔道・ブラスバンド・生物が加わり１５部になりました。

この年に、軟式野球部から硬式野球部に変更し、秋の岐阜県高校野球大会では初出場でベスト３入りしました。この結果、県高校野球部会議でセンバツ大会出場に選ばれた。加盟１年目での推薦校は異例でした。



岐東高校開校前年（昭和31年度）

創立の萌芽

昭和28年頃、各界からの要請を受けて、進学専門の男子部設立の話が学園に持ち込まれるものの、具体化は見られなかった。

昭和31年10月10日、武藤嘉門岐阜県知事からの富田学園に対する要請を受け、富田女子高校の富田勇校長、後藤秀彦副校長、野上正・二木鉦太郎両教諭の話し合いが発端となり、同年12月24日、男子高校の設立が正式に決定した。

校名・校章の決定

校名の候補にあがったのは、長森高校、金華高校、岐阜育英高校、城東高校などであったが、最終決定の間際になって出てきた「岐東高等学校」の案が採用された。その理由は、①学校の所在地が岐阜市の東部にあり、②ものごとはすべて東方から始まるという古くから伝わる思想があり、③東の空に登る太陽のように輝き栄えたいという願いが込められている、などである。

校章についても、翌年1月8日、他校の校章・家紋・各都市の市章などいろいろな資料を集めて研究し、多くの案の中から「東」という字を図案化する案が採用され、現在の校章が決定した。

校章案

３．昭和３３年秋に校旗・校歌完成までの「岐阜東高校校歌制定」道筋。

校歌制定の気運起こる

野球部をはじめとする部活動の活躍が目立ち始めることに伴って、昭和32年6月に「応援団」が結成された。この時点では、まだ校歌は制定されておらず、先に応援歌（早稲田大学応援歌『紺碧の空』を参考に）が完成された。

わが校の校歌も面々と歌い継がれてきています。「ひんがしの空～明けわたり～」で始まるわが校の校歌です。校歌制定について公表された資料に見られない話をしたいと思います。

作詞者は各務虎雄（かがみとらお）、作曲者は内本実（うちもとみのる）となっていますね。では、各務虎雄とは、いったいどんな人でしたでしょうか。各務虎雄先生は、日本の国文学者であり、俳人でもありました。各務先生は岐阜県山県市のご出身で、東京大学をご卒業後、文部省図書監修官や岐阜大学の教授を務められました。また、「美濃派の獅子門三十七世」を継ぎ、美濃派俳諧を受け継いだ俳人でもあります。

しかし応援団は作ったものの、やはり校歌がなくて困った経験から、昭和33年夏、職員・生徒双方から校歌をぜひとも制定しようとする動きが出てきた。そこで、校歌の歌詞を生徒や保護者から募集することになり、夏休み直前にその要項を発表した。しかし、夏休み後に締め切ってみると、応募はたった数編で、これはと決定するに適当なものがなく、校歌の制定は次の機会を待たねばならなくなった。

岐阜東高等学校「校旗」

「美濃派」とは、皆さんご存じだと思いますが、松尾芭蕉門下で美濃の弟子の各務支考に始まる一派の事です。支考の庵号獅子庵から「獅子門」を自称した江戸時代前期の俳諧師で、「蕉門十哲の一人」として知られています。

各務虎雄先生はこの各務支考の獅子門の一派で、その歴史は 350 年以上にわたり、現在日本で一番古い結社とされています。

しかし、その後も学校ではこの校歌制定に関していろいろと協議が継続された。その結果、校歌の作詞を各務虎雄岐阜女子短期大学長に依頼することが決定し、また作曲は各務学長の推薦によって、内本実岐阜大学教育学部教授に依頼することとなった。

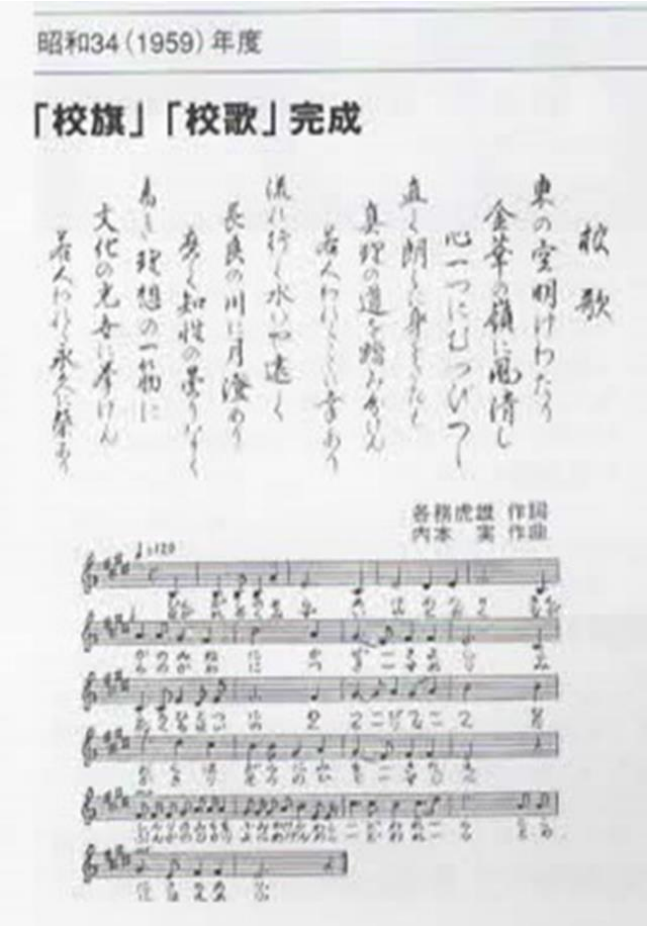
それとともに学校の象徴となる「校旗」もぜひこの機会につくろうという気運が高まり、図柄や色彩についていろいろ検討して決定、ただちに発注した。（この校旗は、岐阜東高等学校へ校名変更～昭和37年4月～後も、昭和61年度に新調されるまで使用された）

一方、内本実先生は、昭和期の歌手で、その音楽活動では多くの人々に感銘を与えました。内本先生は、大阪音楽学校出身で、昭和初期に「コロムビア専属歌手」となりました。彼の代表的な楽曲に「愛国行進曲」があります。この曲は愛国心を讃えるメロディで、当時の社会情勢に対する思いを表現しているといわれています。内本先生の音楽は、その美しい歌声と情熱的な表現で多くの人々に愛されました。戦前にはイタリア王立サンカルロ劇場の首席声楽教師としても活躍しました。戦後は、名古屋の NHK 女声合唱団の番組「花のコーラス」の指揮者や、大垣音楽短期大学の学長を務められました。

昭和 32 年に岐阜東高校が創立された時期には、各務虎雄先生と内本実先生は岐阜大学で教鞭をとっておられ　各務虎雄先生は岐阜大学学芸学部教授国語国文学科の教授、内本実先生は、岐阜大学学芸学部教授音楽学科の教授でした。

『十年の歩み』岐阜東高等学校 1969（昭和 33 年度）にあります「校歌制定については先に一時見送ることになっていたが、その後も学校ではいろいろ協議を続けていた。その結果、校歌の歌詞を各務虎雄岐阜女子短期大学長に依頼することが決定した。また作曲は各務虎雄学長の推薦によって岐阜大学教育学部内本実教授に依頼することになった。」ｐ.53～54（昭和 34 年度）「校歌校旗完成（昭 34.5.18）」との記事が有ります。そして、内本先生が直接わが校の校歌の歌唱指導をしたと、岐阜新聞朝刊　1959.5.19 ｐ.5　「岐東校が校歌と校旗披露式」の記事があります。

前年秋に発注した「校旗」と「校歌」がついに完成し、5月18日に、校歌作曲者の内本実先生を迎え、明徳公民館で盛大に発表された。この発表会では、作曲者内本実先生から男子生徒に歌いやすい校歌にするため、作曲の際にいろいろと考慮されたことなど作曲苦労話を聞かせていただき、その後、直接校歌の歌い方の指導を受けた。最後に生徒会長の発声で「岐東高校バンザイ三唱」をして会を閉じた。こうしていつも肩身の狭い思いをしていた岐東高校生徒にも、胸をはって声高らかに歌うことができる校歌が正式に誕生したのである。


昭和34（1959）年度

「校旗」「校歌」完成

校歌

東の空明けわたり
金華の嶺に風清し
心一つにむつびつつ
直く朗らに身をたし
真理の道を踏みあらん
若人われらくしき学あり
流れ行く水いや遠く
長良の川に月澄めり
あゝ知恵の果てなく
あゝ理想の一筋に
文化の光を求めん
若人われら永久に栄あ

各務虎雄 作詞
内本　実 作曲

この時期、わが高校の第 4 代校長になられた長谷川匡一先生は、岐阜大学教育学部国語文学科の学生さんでした。長谷川先生は、昭和 32 年に岐阜大学を卒業してすぐにわが校の国語の先生に赴任されました。また、長谷川先生は、「校歌」という題で、昭和 30 年 10 月の岐阜新聞に『素描集』随筆を掲載し、岐阜県下の高校 107 校の校歌について調べたとし、「一、作詞者について　もっとも多いのが各務虎雄で 16 校、－後略－二、作曲者について　一位は内本実の 11 校、－後略－」で、わが校の校歌は、長谷川先生を介して出来上がってきことが解って来ました。余談ですが、最後に「むつびつつ」は各務先生が「つ」に拘っておられ、「む**す**びつつ」では無く「む**つ**びつつ」と歌うのが、本家本流だとお伝えしておきます。

４．岐阜市立図書館への調査依頼（ joho-chuo@gifu-lib.jp ）

長谷川先生が奔走されて「わが校の校歌」が完成したことは、「五十年のあゆみ」から推察されましたが、これは事実なのか確証が持てませんでした。そのため、更に追跡調査を行うため、令和 5 年 12 月 8 日に岐阜市立図書館を訪館し、次の質問①と②の調査を依頼しました。

岐阜市立中央図書館情報支援係さま

大変お世話になります。

現在、母校である岐阜東高校の創立時に掛かる資料の調査を行っております。もう 60 年を超える前の事で、当時の様子を伺い知ろうとしても手持ちの資料に頼るしかなく、当時の恩師も数名となって来ており正確な資料を揃えるに至っておりません。恩師の御存命の内に、なんとか確かな資料を後世に伝えたくいろいろお尋ねするのですが、大まかな事実関係はこれまでの学校史などを超えることは無く、そこには限界が有りました。いずれも推測の域を超えないことが多々あり、岐阜東高校同窓会としても限界を感じていた所です。

また、令和 6 年度には、同窓会誌「ひんがし 47 号」を 5 年振りに発行する予定でいます。この際、次の 2 点について調査をして頂きたいと思います。

【質問①と②】

①各務虎雄氏、内本実氏の略歴。岐阜大学にいつ頃所属していたか。長谷川匡一氏が二人の門下生であったか。

②各務虎雄氏、内本実氏が岐阜東高等学校の校歌を作詞・作曲することになった経緯。

以上の質問は、長谷川先生が岐阜大学で勉学に励んでおられた頃に、各務虎雄先生と内本実先生とどんな時期を過ごされていたのか客観的に考察するためです。「五十年の歩み」を超える基礎資料が必要だったからで、そして、確かな事実を後輩の皆さんに正しく伝え、後世に残しておきたいと考えたからです。

数日後の令和 5 年 12 月 20 日に、岐阜市立中央図書館情報支援係より、メールにて回答を受け取りました。その結果を、以下に示します。

【① の回答抜粋】

各務虎雄氏、内本実氏の略歴と長谷川匡一氏が岐阜大学に在籍していたころ二人の門下生であったか。

i)『岐阜年鑑』(岐阜タイムス社) に岐阜大学の職員録が掲載されていました。1953 年版（1952 年出版）ｐ.290　国立岐阜大学学芸学部教授の欄に「各務虎雄」、ｐ.291（同）講師の欄に「内本実」、1954 年版（1953 年出版）ｐ.294、1955 年版（1954 出版）　ｐ.445 には国立岐阜大学学芸学部教授の欄に両名の名前があります。

ii)『岐阜縣学事関係職員録　昭和２９年度』（岐阜県学事関係職員録編集委員会 1954）p.5　岐阜大学学芸学部　教授　国語国文学科　各務虎雄

p.6　岐阜大学学芸学部　教授　音楽学科　内本実

と両名が掲載されています。当館は『岐阜縣学事関係職員録』の昭和 30 年度、31 年度を所蔵しておらず、昭和 32 年度ｐ.324 には「岐阜大学学芸学部　教授　音楽学科　内本実」と内本氏のみ掲載されています。各務虎雄氏については「昭和 31 年 6 月　岐阜大学退官」と『各務虎雄遺稿集』（各務　虎雄／著　1986）p.354 にあります。

iii)長谷川匡一氏が昭和 32 年に岐阜大学教育学部国語国文学科を卒業している（『わが人生論　岐阜編下』文教図書出版　199400　ｐ.100）ので在学期間を 4 年とすれば、昭和 28 年頃から各務虎雄氏が退官した昭和 31 年 6 月までは 3 名が同時に岐阜大学に在籍していたと思われます。各務虎雄氏は国語国文学科の教授で長谷川匡一氏も国語国文学科を卒業していますが、師事したかわかるような資料は見つかりませんでした。

iv)各務虎雄氏、内本実氏、長谷川匡一氏の略歴は下記の資料に掲載されています。

○各務虎雄氏略歴

『各務虎雄遺稿集』（各務　虎雄／著　1986）p.353～354

『岐阜県人物・人材情報リスト』（日外アソシエーツ　1994）p.99

○内本実氏略歴

『新撰芸能人物事典　明治～平成』日外アソシエーツ　201011　p.124

○長谷川匡一氏略歴

『わが人生論　岐阜編下』文教図書出版　199400　ｐ.100

『３０年の歩み』　岐阜東高等学校　1987　ｐ.868903

『ひとつ葉　歌う詩研究誌』　長谷川 国一／編　ひとつ葉会　1983

『歌う詩　61 号』歌う詩グループ　197207

『中学校の校歌にうたわれている山地に関する地理教育学的研究』（国立国会図書館デジタルコレクション）永続的識別子　info:ndljp/pid/3188102　251 コマ

【①　で調査に使用した資料】

『岐阜大学の五十年』岐阜大学　1999
『岐阜大学の７０年』創立７０周年記念誌編集部会　201906
『明治百年岐阜文化スケッチ』岐阜県ユネスコ協会　1968
『岐阜県人事名鑑』　岐阜民友新聞社／編　岐阜民友新聞社　1962
『岐阜県名士録』　古瀬　鮎香／編　岐阜県名士録編纂協会　195911
『岐阜県名士録』　古瀬　鮎香／編　岐阜県名士録編纂協会　1963
『岐阜県名士録』　古瀬　鮎香／編　岐阜県名士録編纂協会　1967
『岐阜市史　通史編　現代』　岐阜市　1981
『濃飛文化史』　小木曾　旭晃／著　岐阜タイムス社　195204
『ふるさとの文学』岐阜地区高等学校国語教育研究会／著　大衆書房　198903
『ひとつ葉　歌う詩研究誌』　長谷川 国一／編　ひとつ葉会　1983
『歌う詩　61 号』歌う詩グループ　197207
『中学校の校歌にうたわれている山地に関する地理教育学的研究』（国立国会図書館デジタルコレクション）永続的識別子　info:ndljp/pid/3188102　251 コマ
岐阜新聞朝刊 , 1956 0623, 7、岐阜新聞夕刊 , 19560703,1 記事内容　岐阜女子短期大学長に各務虎雄氏
朝日新聞朝刊 , 19840301(東京）23　各務虎雄氏__訃報
岐阜新聞朝刊 , 19840309 , 11　記事内容　各務虎雄先生を悼む
朝日新聞夕刊 , 19851116(東京) 11　　内本実氏__訃報
岐阜新聞朝刊 , 19880702 , 19　記事内容　長谷川匡一(ひと人)
岐阜新聞朝刊 , 19900521 , 1　記事内容　流域に生きる 岐阜を支える人々 音楽界 30 サウンド人生 近藤浩子 井上浩 長谷川匡一
中日新聞朝刊 , 20131108 , 24　記事内容　（訃報）長谷川匡一氏死去

【② の回答抜粋】各務虎雄氏、内本実氏が岐阜東高等学校の校歌を作詞・作曲することになった経緯。

・岐阜東高等学校の校歌について下記の資料に以下のような記述がありました。

○『十年の歩み』岐阜東高等学校　1969p.48（昭和 33 年度）「校歌制定については先に一時見送ることになっていたが、その後も学校ではいろいろ協議を続けていた。その結果、校歌の歌詞を各務虎雄岐阜女子短期大学長に依頼することが決定した。また作曲は各務虎雄学長の推薦によって岐阜大学教育学部内本実教授に依頼することになった。」ｐ.53～54（昭和 34 年度）「校歌校旗完成（昭 34.5.18）」内本氏が校歌の歌唱指導をしたという記述がありますが、校歌を作曲の依頼に関することは書かれていません。下記の岐阜新聞朝刊「岐東校が校歌と校旗披露式」の記事も同様です。

○岐阜新聞朝刊　1959.5.19　ｐ.5　「岐東校が校歌と校旗披露式」

○『素描集　第 96 集』岐阜新聞社　199310　ｐ.49

長谷川匡一著「校歌」という随筆が掲載されていて、岐阜県下の高校 107 校の校歌について調べたとし、「一、作詞者について　もっとも多いのが各務虎雄で 16 校、－後略－二、作曲者について　一位は内本実の 11 校、－後略－」と記述していますが、岐阜東高等学校の校歌を各務虎雄に依頼した経緯などは書かれていません。

【②　で調査に使用した資料】

『歩み』岐阜東高等学校　1996,10

『ひんがし創刊号～２２号』岐阜東高等学校同窓会　1986

岐阜東高等学校ホームページ（ https://www.gito.ed.jp/ ）

これらの回答を基にして、3 名の先生方の岐阜大学での在籍状況を「岐阜東高校校歌策定経緯の調査」として表にしました。赤い枠で囲った 1953 年から 1956 年の間に、長谷川先生が各務虎雄先生、内本実先生と同じ岐阜大学学芸学部（現在の岐阜大学教育学部）に在籍されており、それぞれ面識が有りました。この密度の濃さを背景にして、当時、幾つも校歌を作っておられた両先生に白羽の矢が当たり、最も頼みやすかった長谷川先生が交渉に当たられたのだと思われます。

そして、初めての卒業生を「校歌」と共に世に送り出すことが出来ました。皆さんも、もう一度、母校の校歌がこの様にして出来た事に思いを馳せ、味わってみては如何でしょうか？

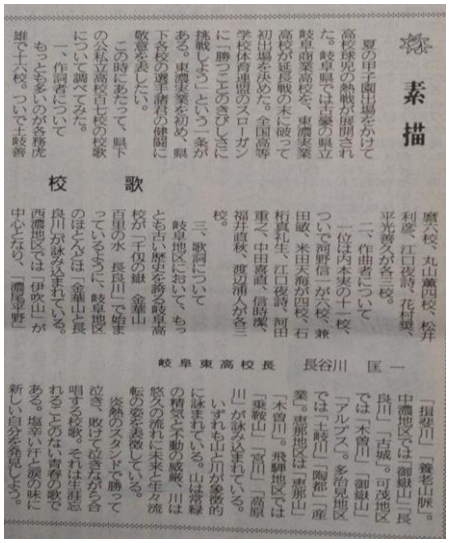
岐阜東高校[校歌]策定経緯の調査（令和6年2月17日）

西暦年	和暦年月日	各務虎雄（かがみとらお） 作　　詞	内本実（うちもとみのる） 作　　曲	長谷川匡一 （はせがわきょういち）
略歴		国文学者、俳人で、多くの学校の校歌を作詞しました	昭和期の歌手、作曲家、音楽教育者	岐阜東高校国語科教諭、教頭、校長
1900年	明治33年1月6日	岐阜県山県郡山県村に生まれる。		
1905年	明治38年6月11日		大阪に生まれる。？	
1923年	大正12年4月1日	東京帝国大学文学部国文学科卒☞文部省図書監修官となる		
1926年	昭和元年		「全国中等学校優勝野球大会の歌」に第12回全国中等学校優勝野球大会の開催に当たり初代大会歌として作成された。	
1927年	昭和2年		大阪音楽学校卒業	
1931年	昭和5年	東洋大学教授		
			イタリアへ留学	
1933年			コロムビア専属歌手	
1935年			この行進歌は、「全国高等学校野球選手権大会の開会式」の入場行進で使用されている。（春の選抜大会）	岐阜に生まれる。？
1938年			タイヘイレコードで『愛国行進曲』を吹き込む	
1945年	昭和20年8月15日	終　　戦		
		国文学者、俳人で、多くの学校の校歌を作詞しました	戦後は、名古屋のNHK女声合唱団の番組「花のコーラス」の指揮者として活躍した。	
1953年	昭和28年	岐阜大学園芸学部国語国文学教授	岐阜大学園芸学部音楽科　教授	昭和28年4月1日岐阜大学入学
1954年	昭和29年	同　　上	同　　上	岐阜大学学生
1955年	昭和30年			同　　上
1956年	昭和31年10月10日 （開校前年）	同上（6月に退官）⇒岐阜女子短期大学学長		
1957年	昭和32年 （開校元年）	岐阜女子短期大学　学長		昭和32年3月31日岐阜大学教育学部国語国文学科卒業⇒岐東高校国語科教諭
1958年	昭和33年 （開校2年）	○「校歌制定については先に一時見送ることになっていたが、その後も学校ではいろいろ協議を続けていた。その結果、校歌の歌詞を各務虎雄岐阜女子短期大学長に依頼することが決定した。また作曲は各務虎雄学長の推薦によって岐阜大学教育学部内本実教授に依頼することになった。」 ○後藤満彦先生（第五代校長）の談話（2023年12月21日）『当時の職員会議で、長谷川匡一先生が両恩師に頼みに行くように決定した。このころ、各務虎雄・内本実コンビの校歌は既に幾つか作られていた。		
1959年	昭和34年4月1日 （開校3年）	岐阜女子短期大学学長	岐阜大学教育学部教授	岐東高校国語科教諭

1959年	昭和34年 （初の卒業生）	○内本氏が校歌の歌唱指導をしたという記述がありますが、校歌を作曲の依頼に関することは書かれていません。下記の岐阜新聞朝刊「岐東校が校歌と校旗披露式」の記事も同様です。（1959年5月19日「校旗校歌」完成） ○第3期商業科卒業の佐々木勇氏が「校歌」を完璧に熱唱。毎日、校庭で校歌の練習に励んだ。そして、初の卒業生を世に送り出す時に、間に合う事が出来た。		
1962年	昭和37年4月1日	岐阜女子短期大学・学長	大垣音楽短期大学・学長	岐東高校国語科教諭
1974年	昭和49年4月1日			教頭
1984年	昭和59年2月28日	歿。享年８４歳。		
1985年	昭和60年11月15日		歿。享年80歳。（東京）	
1987年	昭和62年4月1日			校長（第四代）
2013年	平成25年11月7日			歿。享年78歳。
2024年	令和6年2月17日	○岐阜新聞の「素描」に、長谷川匡一著「校歌」という随筆が掲載されていて、岐阜県下の高校107校の校歌について調べておられます。「一、作詞者について　もっとも多いのが各務虎雄で16校、－後略－二、作曲者について　一位は内本実の11校、－後略－」と記述しています。しかし、岐阜東高等学校の校歌を各務虎雄に依頼した経緯などは書かれていません。		
＊この年表は完全に完成されたものではありません。一部に誤りが有るかも知れませんので二次利用についてはお断りします。				

５．長谷川先生（第四代校長）のご尽力に感謝。

1993 年（平成 5 年）8 月 6 日金曜日「岐阜新聞（４）素描」に寄稿された長谷川匡一先生の寄稿記事です。



素描

夏の甲子園出場をかけて高校球児の熱戦が展開された。岐阜県では古豪の県立岐阜商業高校を東農実業高校が延長戦の末に破って初出場を決めた。全国高等学校体育連盟のスローガンに「勝つことのきびしさに挑戦にしよう」という一条がある。東農実業を初め、県下各校の選手諸君の健闘に敬意を表したい。この時にあたって、県下の公私立高校 107 校の校歌について調べてみた。作詞者についてもっとも多いのが各務虎雄で 16 校。ついで土岐善磨 6 校、丸山薫４校、松井利彦、江口夜詩、花村奬、平光善久が各３校。

一、作曲者について

内本実の 11 校、ついで河野信一が６校、兼田敏、米田天海が４校、石桁真礼生、江口夜詩、河田重之、中田喜直、信時潔、福井直秋、渡辺浦人が各３校。

二、歌詞について

岐阜地区において、もっとも古い歴史を誇る岐阜高校が「千仞の嶽　金華山　百里の

水　長良川」で始まっているように、岐阜地区のほとんどは「金華山と長良川」が読み込まれている。西濃地区では「伊吹山」が中心となり、「濃尾平野」「揖斐川」「養老山脈」。中濃地区では、「御嶽山」「長良川」「古城」。可茂地区では「木曽川」「御嶽山」「アルプス」。多治見地区では「土岐川」「陶都」「産業」。恵那地区では「恵那山」「木曽川」。飛騨地区では「乗鞍山」「宮川」「高原川」が詠み込まれている。

いずれも山と川が象徴的に詠まれている。山は常緑の精気と不動の威厳、川は悠久の流れに未来と生々流転の姿を表徴している。炎熱のスタンドで勝って泣き、敗けて泣きながら合唱する校歌。それは生涯忘れることのない青春の歌である。塩辛い汗と涙の味に新しい自分を発見しよう。

氏名	職名	担当教科	在職期間（始）	（終）	勤務年数
長谷川匡一	専任教諭	国語	昭和32年4月1日	昭和49年3月31日	17
	教頭		昭和49年4月1日	昭和62年3月31日	13
	校長		昭和62年4月1日	平成6年3月31日	7

＊この投稿記事は、長谷川先生が退職される年に寄稿されました。

６．後藤満彦先生（第五代校長）との談話（令和５年 12 月 21 日）

後藤満彦先生のご自宅を訪問し、これまでの調査結果についてアドバイスを受けに行きました。

当時を振り返り、後藤先生の話しでは、『当時の職員会議で、長谷川匡一先生が両恩師に頼みに行くように決定した。このころ、各務虎雄・内本実コンビの校歌は既に幾つか造られていた。』との事が、実話として確認できました。開校時の岐阜東高等学校（当時は岐東高等学校）では、議論こそ続けられていたが、まだ校旗校歌の制定が決定されていませんでした。周囲の高校の校歌を調べ、一番頼みやすい長谷川匡一先生に白羽の矢が立ったとのことです。『各務虎雄・内本実の名コンビ』がタイミング良く、すぐ近くに居られたのも、わが校に強い運気が有ったものと思われます。

また、第３期卒業生の佐々木勇氏（岐阜市柳ケ瀬小柳町のすし処『不二家』）に校歌について、当時の様子をお尋ねしました。佐々木氏は、岐阜東高校に入学時には既に校歌が有り（制定後２年目）、毎日校庭に出て大声で校歌を歌ったとのことです。本人も「ひんがしの空～明けわたり～」とスラスラと口遊めた事から、母校創立３年目には生徒全員が校歌を歌っていた事は間違いありません。

７．むすび

現在、「ひんがし会館」に残っている資料の調査、後藤満彦（第五代校長）先生への聞き取り、並びに岐阜市中央図書館での調査で、だんだんと校歌制定時の経緯が明らかになりました。男子校として岐阜東高校が開校する前夜、また開校時の慌ただしい中での校旗校歌制

定は当時の必須事項でした。無事に出来上がった初々しい校歌で、第一期同窓生が世に送り出されたのは幸運でした。やがて部活動の活性化や硬式野球部設立直後の甲子園出場と、わが校は輝かしいスタートを切って行くのでした。そして、この情熱こそが、やがてわが校の心の支えとなる「やり抜く精神」に結びついて行くのです。

ここで改めて先人の思いが感じられるのは、諸先輩方の熱い心と若々しい先生方の母校に対する愛情です。私にとっても、もう一度原点に立ち戻り、わが校の設立当時のご尽力を問い直す良い機会となりました。

今回の調査では「岐阜市立図書館」のご協力無くして進展する事は無かったでしょう。改めてここに心より御礼申し上げます。　了